ウェズレー・C・ミッチェルの貨幣経済と近代文明の概念

齋　藤　宏　之

I　ミッチェルの制度分析

制度学派の創始者はソースタイン・B・ヴェブレン（Thorstein Bunde Veblen）だが，その後には彼の伝統を受け継いで研究を行ったウェズレー・C・ミッチェル（Wesley Clair Mitchell）とジョン・R・コモンズ（John Rogers Commons）が続いた．制度学派は，経済思想に対するアメリカの貢献[1]であり，1900年頃に始まり，第一次世界大戦から1930年代にかけて急速に成長した．それゆえ制度学派の考えは1920年代ならびに30年代に広範な承認を得るに至った．マルコム・ラザフォード（Malcolm Rutherford）は，両大戦期間，制度主義がアメリカ経済学の「主流」の一部であったとし，「制度主義者たちが，経済学の一流のジャーナルにおいて定期的に研究成果を発表し，主たる研究大学で地位に就き……，研究・教育機関を創設するのに意欲的に取り組み，資金援助機関と見事に結びつき，政策決定に深く関与し，アメリカ経済学会（American Economic Association）やアメリカ統計協会（American Statistical Association）の会長になった[2]」点に着目している．

ミッチェルは，ヴェブレンの門下生のなかでも最もめざましい才能をもっていた．ヴェブレンの制度主義を実証的に用い，制度主義に経験的傾向を付与した．統計的研究に専心することによって思弁性を排し，ヴェブレンの先駆的研究により堅固な土台を提供しようとした．新古典主義に対立して，実証主義的土台が経済理論の基礎条件においていかに必要であるか強く主張した．この意味で，ミッチェルが1920年に全米経済研究所（National Bureau of Economic Research）を建設し，25年にわたって指揮した事実を見逃すことはできない．これらの点を踏まえてアラン・G・グルーチー（Allan G. Gruchy）は次の見解を披瀝する．

「経済学は，単に『金銭的論理体系，つまり実在しない状況下で静態的均衡を機械論的に研究すること』に留まらないなら，ミッチェルが断言することは，科学は客観的データに基礎が置かれねばならない．客観的データなら，経済学者は経済体制について一般化したことが妥当であるかどうか検証することができるからである．それゆえ欠かせないのは，経済データを扱う量的あるいは統計的手法を広範に利用することである[3]．」

かくしてミッチェルは，自らの統計手法を用いて実証的研究を遂行すべく，「経済学は将来，量的側面上でより実り豊かに発展する[4]」と考え，

1) Cf. Allan G. Gruchy, *Modern Economic Thought: The American Contribution* (New York: Augustus M. Kelley・Publishers, 1967).

2) Malcolm Rutherford, *The Institutionalist Movement in American Economics, 1918-1947: Science and Social Control* (Cambridge: Cambridge University Press, 2010), p. 7; Cf. Malcolm Rutherford, "American Institutionalism and its British Connections," *European Journal of the History of Economic Thought,* Vol. 14, No. 2, June, 2007, pp. 291-292.

3) A. G. Gruchy, *op. cit.,* p. 44.

4) Wesley C. Mitchell, *Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism* (New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1969), Vol. Ⅱ, pp. 749, 761.

観察を統計的に記録する必要性を訴えた.

ミッチェルは，この観点に立ち，企業がどのように変動するか分析する．それは，貨幣経済がどのような性質を帯びているかを把握するための非常に優れた方法であった．貨幣経済において，経済活動は貨幣所得を獲得し支出する形を取って行われる．有益な財を生産することではなく，十分な貨幣所得を得ることが最重要視される．ミッチェルは，金を儲けることが国家の福利に悪影響を及ぼすことを鋭く看破した．かくして国家経済計画を慎重に促進し，経済的自由を保証しつつ，企業変動から生ずる悪弊を効果的に除去しようとした．その研究成果の一端を 1913 年にその著『景気循環』（*Business Cycles*）に取りまとめた.

ミッチェルは，企業循環は相互に関連づけられた諸現象が集積したものであり，その集積を裏付けるのが経済史という事実である考える．それゆえ企業循環現象の歴史的背景に，その著『景気循環――問題とその設定――』（*Business Cycles: The Problem and Its Setting*）において次のように言及する.

「封建時代の税を金納に振り替えたこと，これに付随した労働・商品地代を貨幣に振り替えたこと，ギルドが生産物を交換するのに伴って発展したこと，町が交易の中心地として建設されたこと，銀行業が生み出されたこと，小売店が成長したこと，商法が創案されたこと，株式会社組織と株式会社が営利企業のほとんどの分野で支配的地位にまで高まったこと，会計学が経済的事業を管理する技法として採用されたこと，特殊機関が投資・投機に備えて進化したこと，全人口が分化し賃金・利潤・投資収益あるいはこれらのタイプを組み合わせる所得に依存して生活するようになったこと，権力が勇敢な人々や高貴な生まれの人々から大富豪や著しい企業能力をもった人々に移動したこと，金を儲ける世界では相当な所得を支配するほどの才能をもたない人々を不安にさせたこと，これらの新しいすべての事情は重なって現時の形の企業経済になっている[5]. 」

しかし上記の著作以外歴史的次元に着目した本格的な研究業績としては，ラザフォードがコロンビア大学の稀覯書・稿本書庫に所蔵されているジョゼフ・ドーフマン・ペーパーのウェズレー・ミッチェル・ファイルのなかで見つけた手書きの講演[6] 原稿だけしかない．しかもそれは，封建制度から市場制度への長期にわたる歴史研究である．この意味でも，ミッチェルの講演原稿を取り上げる価値は決して小さくないといえよう. 実際，その講演原稿をみてみると，効率向上ならびに経済的利害の見地から貨幣経済の長期的変化過程を論じており，そこにおいてミッチェル独自の考え方が見て取れる．またこの種の研究を論文の形で発表しなかった理由の一端を考察することによっても，ミッチェルの経済思想の本質に新たな光明を投じる手掛かりが得られる. この観点から, ミッチェルの論文「貨幣経済と近代文明[7]」を逐次みていこうと思う.

Ⅱ　貨幣経済と近代文明

ミッチェルによれば，ブルーノ・ヒルデブラント（Bruno Hildebrand）が流行させた貨幣経済という用語は，現在でも文化の基本的特徴を表している．ミッチェルは，貨幣経済生活の特徴を金を儲け支出する過程の形を取る点に見いだす．つまり「財を作る代わりに，家族は男性に『金を儲ける』ように要求するし，貨幣所得を使って自らが使用するために知らない働き手が作る財を購入

5)　Wesley C. Mitchell, *Business Cycles: The Problem and Its Setting* (New York: Arno Press, 1975), p. 74.

6)　因みにこの講演は 1910 年 5 月スタンフォード大学にて行われた.

7)　Wesley Mitchell "Money Economy and Modern Civilization (paper read before the Cross-Roads Club of Stanford, May 6, 1910)," edited by Malcolm Rutherford, *History of Political Economy,* Vol. 28, No. 3, Fall, 1996, pp. 329-357.

する[8]」と述べる．

ところが経済学者は，この経済生活のもつ意義を軽視してきた．人間は金銭的環境が生み出すのに環境に注目せず，人間がどのように行動するか今日の高度に発達した貨幣経済において説明する．ミッチェルは，これまで以上に役に立つタイプの経済学を樹立するために，貨幣経済がどのように進化するか全体像を明らかにする必要があると考える．

そこでミッチェルは，アングロ・サクソン人がイングランドに移住した直後から分析を本格的に開始する．アングロ・サクソン人の金硬貨はローマやメロビング王朝の原型を，銀ペニーはピピン（Pepin the Short）が発行した「新しいペニー」を模倣した．銀ペニーは755年以降ある程度規則正しく鋳造され始めた．11世紀には硬貨が一般に普及していたことは，デーン税が課されていたことから分かる．

このように硬貨は鋳造されたけれども，物々交換経済がノルマン征服時には顕著であった．荘園の経済生活は金銭制度に基づいて組織されてはなかった．地主は村人に土地を貸し出し，村人は見返りに用役を提供した．週労働や恩寵賦役を遂行することが義務づけられた．また借地人は，一定の現物税や少額の貨幣を上納しなければならないこともあった．さらに土地に対する自由保有権がなければ，奴隷的賦課金を免れることはできなかった．かくして小作農の債務は，生産物支払い・労働支払い・貨幣支払いの形を取った[9]．

しかしながら地主と耕作者との経済関係において，貨幣が介在する余地はほとんどなかった．荘園はほぼ自給自足ができていたからであった．村人同士の用役は物々交換をした．地主は，私有地の産物を貨幣と交換に売ったのではなく，自分と家族と召使いとで食べ尽くした．

貨幣経済が発展していくうえで最も重要な様相は，荘園の物々交換経済がどのようにして金銭的な方向に沿って再編成されていくか，その過程である．この再編成は，ミッチェルの考えでは，労働用役・現物支払いが貨幣支払いに振り替えられることによって達成された．教会に属する荘園では，振替の過程は漸次的であった．黒死病が1348年に流行しだしたときですら，大多数の隷農は，依然として週労働を行う義務を負っていたが，極めて本質的な変化が引き起こされた．

振替を可能とする必要条件は，借地人が資本を有すること，硬貨が供給されることであった．この点に鑑みて，振替は町や市，巡礼地，修道院，港などの周りの荘園で進行した．ミッチェルのいうところによれば，「地主は，国王や商人と取引するために貨幣を欲した．貨幣地代体制は，会計学の実際的運用が埋め合わせることで，土地管理人の不正行為による損失を減じた．週労働が悪天候や宗教的な祝祭によって被る損失は，旧体制においては由々しいことであったが，その損失もまた減少した[10]．」支配から解放された小作農は，時間をすべて借地を耕すことに充てることができたから，地主も借地人も利益を得た．荘園は貨幣に基礎づけられ，労働から貨幣地代への変遷がもたらされた．

地主は，頻繁に，旧来の私有地を貨幣地代で借地人に貸し出しするようになっていった．この変化を黒死病は早めた．ミッチェルはトマス・W・ページ（Thomas Walker Page）に従い，地主はすでに容認されている振替を廃止したいと思ったかも知れないけれども，新たに振り替えざるを得ないのが常であったという．十分な借地人を荘園に引き留め耕すことが重要な問題となった[11]．ミッチェルはページの所説を引き合いに出す．

「その結果，15世紀の最初の1／3が終了したとき，土地に従属した用役の廃止……は，完成に近づいていた．依然として荘園はある程度存在し

8) *Ibid.*, p. 329.
9) *Ibid.*, pp. 332-333.
10) *Ibid.*, p. 334.
11) *Ibid.*, p. 336.

ていた．……そこでは農奴は労働を僅かしか行わないと考えられていたし，農奴が多大な労働を引き続き行っていた荘園は少ししかなかった．しかしこれらのほとんどの荘園においてその過程が完了したのは，囲い込みの時期が始まった直後であった．そのとき地主は，借地人が立ち去ることを妨害するのを止めたばかりでなく，立ち去るのを助長したのも事実であった．それゆえ 1450 年以降，農奴の強制的労働が依然として耕作している荘園を見いだすことは，極めて珍しくなった．あちこちで土地に従属した用役の痕跡はかなり後の時代にまで残存したけれども，国全体に対しては荘園農業の旧体制は完全にそして永久に崩壊したというのが事実である[12]．」

地主と小作人との金銭的関連は，このように 400 年にわたって進化してきた．この進化と共に社会は深遠に変化した．13 世紀に現れたのが，「モルメン」あるいは「セレンスイ」である．自由借地人と奴隷借地人との仲裁者であり，貨幣地代を支払った．個人が借地人を不断に管理することは失効した．そのとき荘園関係は年に一度か数度一定の納金の支払いに変じた．農奴制はひとつの制度として，貨幣経済が成長し農奴の数が減少したがゆえに衰退していった[13]．

ミッチェルは，もうひとつの重大な社会変化として，日雇い労働者という勤労階級が台頭したことに着目する．「地主が自身の私有地をすべて貸し出さなければ，土地に従属した用役を振り替えることによって，荘園の貸し出した部分を耕す人々を雇用せざるを得ない[14]．」貨幣地代を支払う借地人の数が増大するにつれて，日雇い労働者に対する需要が増大していったに違いないとミッチェルは考える．

またミッチェルは，地所の管理において起こった変化も看取する．荘園は，11 世紀から 12 世紀にかけて地主とその家族の生計の源としての管理から，貨幣所得の源としての管理へ移行していった．

その結果ミッチェルはローランド・E・ブロザロ（Rowland Edmund Prothero）の所説に依拠して，1450 年から 1560 年にかけて実現した農業革命は自給自足から利益を得る農業への変化であったと捕らえる[15]．百年戦争が加速したこの過程を最も顕著に特徴づけるのは，未開墾の土地・私有地・開放耕地を囲い込み，羊の放牧場を作ることであった．牧羊業は高い地代をもたらしたから，地所は次から次へと囲い込まれた．政府はこの囲い込みを止めようとし，10 以上の法律を 1490 年から 1601 年にかけて制定した．しかし金銭的動機，つまり貨幣経済の主動力が打ち負かしたのは，貧民を圧迫した囲い込みを行った人，利潤追求は紳士においては恥ずべきであると考えられた貴族の理想，小作農の反対勢力が支持した慣習であった．

イングランドは，4~500 年前に貨幣経済の文化的影響を受けるようになり，金銭の見地から考える習慣と自らの生活を価格体制の要件に順応させる習慣とを獲得し始めた．

その後単独の王国が七王国に代わって設立された．この過程で，国王がイングランドにおける最大の地主となった．荘園から荘園へと転居し，随行員と共に領地の産物を消費する．国防のために，国王が招集した軍隊は，その国の世帯の代表者から編成されていた．自身の武器を身につけ，食糧と金を持ってきて，無報酬で任務を果たした．危機が差し迫ると，アングロ・サクソン時代の議会は税を強制した．例えば，シップゲルト，デーン税であった．

訓練を受けた職業軍人である傭兵はサクソン時

12) Thomas Walker Page, *The End of Villainage in England* (New York: The Macmillan Company, 1900), pp. 77, 83.

13) W. C. Mitchell, *op. cit.*, pp. 337-338.

14) *Ibid.*, p. 338.

15) Rowland Edmund Prothero, *The Pioneers and Progress of English Farming* (London: Longmans, Green and Co., 1888), pp. 18-22.

代は珍しくはなかった．定期的に支払いをされている限り忠義をもって仕えた．時ならず帰郷して戦争を切り上げようとはしなかった．それゆえヘンリー二世（Henry Ⅱ）とリチャード一世（Richard Ⅰ）は，傭兵の戦隊を好んだ．その当時，貨幣経済に基づいて組織された軍隊の方が効率性が高かったからこそ，イギリス国王は傭兵を封建的徴兵の代わりに用いるに至った[16]．そこでミッチェルは次の見解を披瀝する．

「かくして統治を行う過程で貨幣経済が進化するとき，その歩調は軍事的要求が押し進めた．征服以前建艦税とデーン税，征服後国王の領地での振替や領臣の軍役免除税が生じたのは，一方では国防の必要性や国王の好戦的野心からであったし，他方では金銭組織が効率上優れていることを認識したからであった．その結果として徴税が拡張したが，この拡張が早期に生み出したのが国家権力の顕著な集中であった……[17]．」

さらにミッチェルは，より自由な貿易が促進され商業が発展したことに注目していく．

イギリスの貿易商は，金銭利得を求めて独占的特権を保持しようとした．しかし国王と貴族は，イギリスの貿易商の便益を貿易のより大きな自由のなかで理解したし，エドワード一世・二世・三世（Edward Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ）のもとで外国人はこれまで以上に広範な自由を獲得していった[18]．

国内貿易も同様である．町はそれぞれ自治都市の市民に利益をもたらすと考えられるものに制限を加えようとしたし，自分の町以外の出身の自国商人を外国人として遇した．小売業は，常設店ではなく，町の大きな広場で市の立つ日に営まれた．外国製品を購入するには，大きな定期市まで待たねばならなかった．市を開く権利は，販売人から固定使用料を強制的に取り立てることで利益をもたらした．この権利は，古くからの慣習あるいは貨幣支払いに対する見返りとして国王が授与した．貿易組織を主に特徴づけるのは，ギルド・マーチャント（Gild Merchant）であった．町の人々が要求する特権を拡張したり保護したりした[19]．

企業の量が増大するにつれて，一団の単独の役人が，様々な取引の専門的仕事や多様な利害を管理したり保護したりすることは困難になっていった．これゆえにこそ旧来のマーチャント・ギルド（merchant gilds）に取って代わってクラフト・ギルド（craft gilds）が現れて，取引機能を引き継いでいった．こうしてエドワード一世以降，クラフト・ギルドを促進し，14 世紀前半には絶頂期に達し，その後 2 世紀にわたって続いた．クラフト・ギルドは，親方・一人前の職人・徒弟からなっており，金銭的なつながりより個人的な絆によって結びついていた．

ギルド組織は貨幣経済において成熟した組織とは異なっていた．先ず近代的な意味で終身の勤労階級は存在しなかった．その存在は，工場制度が 18 世紀から 19 世紀にかけて出現するまで待たねばならなかった．次にギルド体制で演ずる資本の役割は小さかった．最後に利潤追求はギルド産業の原動力ではなかった．資本を抜け目なく投資することや信用を利己的に利用することではなかった．

翻って近代貨幣経済においては，価格は個人間の交渉によって決まり，絶えず変動する．また競争によって法外な値を要求されることはないと考えられている．ところが中世の初期貨幣経済において価格を規制するのは，政府あるいは広く認められた半公共的機関であった．法律や慣習が定める貨幣総額が，他人に与える商品や用役と等価であるとして価格を用い始めた．これらの価格が変動することはめったになかった．人々の心に堅固に確立され，価格体制全体が変化することはなかった．

16) W. C. Mitchell, *op. cit.,* pp. 343-344.

17) *Ibid.,* p. 345.

18) William James Ashley, *An Introduction to English Economic History and Theory*（London: Longmans, Green, 1894）, Vol. Ⅰ, pp. 105-108.

19) W. C. Mitchell, *op. cit.,* pp. 345-346.

さらに経済状態が安定していた中世の社会において，「……生活のこの固定した神聖な秩序を維持する唯一の方法は，すべての階級に相応しい生計を立てさせ，今まで以上に豊かにさせないようにしておくような方法で価格を規制することであった[20]．」

ミッチェルは，公正価格を発生論的に説明する．初め教会の神父は，福音の教えに従い，財産を追求することは心の安寧にとって危険であるとみなした．貨幣がさらに広く行き渡り売買による生活が始まると，中世スコラ哲学者はやむを得ず旧来の教義を練り直して新しい状況に適するようにした．取引はそれ自体で罪があるのではなく，売り手が公正価格以上を要求し買い手が公正価格以下を要求した場合罪があるとした．この教会法の教えによってキリスト教徒の君主の義務となったのは，価格が適切に規制されているように配慮することであった．法律・行政によって公正価格を維持しようとすることも義務となった[21]．

中央政府は，パンの価格を最初に規制した．1 ファージングのパンの重量と小麦 4 オンスの価格との間でスライド制を確立した．「巡回裁判を実施することはすぐに通常の市当局の任務の一部分となった[22]．」スライド制に基づく同様の規制はエールに関して採用された．市当局は，その他に，獣肉・家禽・魚の価格を規制した．

そうしているうちに黒死病によって政府は価格の法的規制を別の方向で拡張するに至った．1349 年の国王宣言，1351 年の議会制定法は，一方では労働力の価格を，他方では生活必需品の価格を，疫病以前に流布していた相場で固定しようとした．ミッチェルは，ウィルヘルム・ハースバハ（Wilhelm Hasbach）が提示した労働者に関わる 25 本の制定法のリストに着目する．そのリストに含まれるエリザベス法が与える賃金は，治安判事が四季裁判所で決めた．しかしエリザベス女王の時代以前でも，価格を法的執行によって不変に保つことはできなかった．換言すれば貨幣経済が急速に成長するなかで，黒死病，戦争，貴金属の流入，通貨の質を低下させたことが，長年続いている慣習，公正価格の考え，政府の抵抗という障害を克服し，16 世紀に価格革命を引き起こした[23]．

みられるように貨幣の使用は，経済関係から経済関係へと拡大していった．その過程は累積的に変化し，貨幣経済制度は漸次的に成長した．

お互いの取引を金銭的土台に基礎づける意識的習慣は拡張した．ミッチェルによれば，イギリス国王は，借地人が兵役を遂行する代わりに兵役免除金を支払うことを許可したとき，利点を見越した．国王は傭兵が封建的軍隊に比べ効率的であることが分かった．借地人は多大の費用を要する海外旅行に比べ支払いを好んだ．しかし，貨幣の使用から得られる利益を明白に理解することは，上述の意識的習慣に立ち後れたとミッチェルはみる．

兵役免除金と振替は，ミッチェルの分析に従えば，国王による最高位の借地人の直接的かつ個人的管理ならびに荘園領主による隷農の不断の管理を緩和した．納金が行われている限り，上官は部下の活動を管理する理由はないからであった．結果として生じた個人的自由が個人的責任と結びついて，隷農は因習から解放され，職人は賃金所得者となった．こうして自らの貨幣所得に目配りしなければならなくなった．つまり自らの習慣を新しい状況に順応させなければならなかった．貨幣経済が成長するにつれて，節倹・明敏な計算という金銭的美徳が生き延び，忠義・勇敢・敬神という美徳は消滅していった[24]．

同様に，貨幣経済においては旧来の騎士的なタイプの貴族社会が存続するには不向きであった．

---

20) *Ibid.*, p. 349.
21) *Ibid.*, pp. 349-350.
22) W. J. Ashley, *op. cit.*, Vol. Ⅰ, p. 188.
23) W. C. Mitchell, *op. cit.*, pp. 351-352.
24) *Ibid.*, p. 355.

貴族社会の土台や精神は変化していった．その変化をバラ戦争は促進した．貴族社会は富の社会となっていく．爵位を授けられた商人の子息は，ブルジョア的な父親の美徳を恥じるようになったし，金を儲けることに積極的に参加することを止めた．こうした新しいタイプの一族は，騎士道的美徳を余りにも遵守したので，非企業的な習慣に蝕まれ崩壊した．

一般大衆ならびに貴族の状況がこのように変化することで経済効率が著しく向上した．ミッチェルは，貨幣の使用を成長させた原因を指摘する．「……交換を促進したこと，地理的地域間・諸個人間で複雑な分業ができるようになったこと，皆に自らの職業を選択する機会を与えたこと，資本を増強するとき最も有能な企業組織者が自らの力を増すことができたこと，誰でも独力でうまく行くようにさせたり貧困という罰を受けさせたりしたことであった……[25]．」そこでミッチェルは，貨幣経済組織が経済技法や科学知識を効率的に改善したと捕らえる．

ミッチェルによれば，日常の貨幣使用が思考・活動様式にもたらす変化は捕らえ難い．福利の概念が明確に案出されるなら，この規準に基づいて金銭的価値が習慣的に判断されるし，日々の思考を貨幣以外のことに関わる方向に向けていくとミッチェルは考える．

Ⅲ　ミッチェルの制度変化観

ここで全体として本稿で取り上げたミッチェルの所説を整理しながら検討してみることとする．

ミッチェルは，金を儲け支出する過程の形を取る貨幣経済の進化を詳らかにする．

ミッチェルの考えでは，ノルマン征服時には物々交換経済が顕著であった荘園は，労働用役・現物支払いが貨幣支払いに振り替えられることによって，金銭的な方向に沿って再編成されていった．貨幣経済が成長するにつれて農奴制は衰退していった．また貨幣地代を支払う借地人の数が増大し，日雇い労働者に対する需要が増大していった．さらに荘園は，11 世紀から 12 世紀にかけて生計の源としての管理から貨幣所得の源としての管理へ移行していった．その結果農業は自給自足から利益を得る方向に向かって変化していった．こうしてイングランドでは，貨幣経済の文化的影響を受けるようになり，金銭的思考習慣を獲得し始めたとミッチェルはみた．

その後単独の王国が設立され，イングランドにおける最大の地主となった国王は，イギリス傭兵を封建的徴兵の代わりに用いた．貨幣経済に基づいて組織された軍隊の方が効率が高かったからであった．

国王と貴族は，イギリスの貿易商の便益を貿易のより大きな自由のなかで理解したし，外国商人の自由を拡大していった．企業の量が増大するなかで，一団の単独の役人ではすべての仕事・利害を管理しきれなくなったので，マーチャント・ギルドに代わりクラフト・ギルドが現れ商業が発展した．

これに対して政府あるいは半公共的機関が，中世の初期貨幣経済において価格を規制したり，公正価格を維持しようとした．しかしながら，より自由な貿易が促進され商業が発展し貨幣経済が急速に成長するなかで，価格を定期的に調整しなければならなかったがゆえに，市場価格を規制から解放し価格革命が起こったとミッチェルは考えた．

ミッチェルの所説に従えば，貨幣を使用する過程は累積的に変化した．兵役免除金と振替によって隷農や職人は，自らの習慣を新しい状況に順応させなければならなかった．旧来の騎士的なタイプの貴族社会は，貨幣経済において崩壊した．こうして経済効率が著しく向上していったとミッチェルは捕らえた．

次に如上のミッチェルの所説の特徴をみていくこととする．ミッチェル独自の制度主義の考えを

25)　*Ibid.*, p. 356.

明らかにすることができるからである．

ミッチェルが言及する説明変数の範囲は広範である．ミッチェルは，様々な要因が累積的に作用し複合的結果を生み出すと指摘する．効率向上や経済的利害の見地から貨幣支払いと市場の導入・拡張に注目する．効率向上ならびに相互利益を伴ったから，労働用役・現物支払いが貨幣支払いに振り替えられた．国王や貴族の利害にかなったから，取引が自由になりギルドが促進された．こうして非金銭的様式の組織や交換は衰退していった．

因みにミッチェルは，同じ制度学派の経済学者でもヴェブレンほど科学技術の要因は重要視していない．ヴェブレンは，「資本主義は手工業体制が機能することから出現した．科学技術の規模ならびに効率が増大することを通して出現した[26]」と述べる．グルーチーによる「ヴェブレンの説明によれば，制度と制度が埋め込まれている文化は，時間とともに，科学技術の変化に反応して変化する．科学技術のこれらの変化は，人間の根拠のない好奇心が環境に影響を与えることに起因する[27]．」これに対しミッチェルは，貨幣支払いと市場交換の拡大を経済的利点に基づいて説明する．貨幣の使用が増大することにより，手元にある能力・天然資源をこれまで以上にはるかに効率的に利用できる組織が発展した[28]．中世と比較して現代の貨幣経済組織の方が経済技法や科学知識を改善した．貨幣の使用が増大し市場が成長したことによって，封建制度の先入観[29]に破滅的な影響をもたらし，金銭的な思考習慣を発展させることになった．そこでミッチェルは，経済的合理性は制度が生み出すと考える．制度は人間行動に影響を及ぼすとし，次の見解を披瀝する．

「……経済状態が安定していることが中世の社会を特徴づけた．荘園の奴隷階級の間であろうが，町の職人の間であろうが，封建社会の上層階級の間であろうが特徴づけていた．人々の階層が，国王から奴隷に至るまでのすべての人々に，生活するうえでの適切な場を定めた．誰でも自分の場を知っていたし，どのような暮らし方が自分の場に相応しいかも知っていた．あえて自らの場を越えようとするものはほとんどいなかった．もっとも自らの階級のためになる成員として成功したいと望むのが常であった．こうなるとこの秩序だった社会体系は，過去から受け継がれてきており，その時代の世人共通の考え方に対し良くて美しいものとして是認されることを示した．つまり神の意にかなっており，神が命じたものとして是認されることを示した．このように安定していることが，物々交換経済の硬直した状況下において必定であったであろう．そして何世紀もの間物々交換が優位を占めた．長い期間にわたって社会秩序のこの概念は人々の心に余すところなく教え込まれたので，社会秩序を維持しようとする以外のことはできなかった．そのとき貨幣経済が始まったことによって，これまで以上に柔軟になることが予測できた．しかし生活のこの固定した神聖な秩序を維持する唯一の方法は，すべての階級に相応しい

26) Thorstein Veblen, *The Instinct of Workmanship: And the State of the Industrial Arts* (New York: Augustus M. Kelley, Bookseller, 1964), p. 282.（松尾博訳『ヴェブレン　経済的文明論――職人技本能と産業技術の発展――』ミネルヴァ書房，1997 年，299 ページ．）――なお，訳文は必ずしもそれによったわけではなく，私の自由に訳している．

27) A. G. Gruchy, *op. cit.*, p. 21.

28) Cf. Wesley C. Mitchell, "The Criticism of Modern Civilization," edited by Malcolm Rutherford, *Journal of Economic Issues*, Vol. 29, No. 3, September, 1995, pp. 663-682.

29) 先入観とは，ミッチェルによれば，「信念であり，人間の思考の一般的傾向を方向づける．批判的に吟味されることはない．」〔Wesley C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money and Other Essays* (New York: Augustus M. Kelley, Inc., 1950), p. 203.〕先入観は，常識的見解から，信念として飾り立てられた個人的偏見ならびに願望に次第に変化する．先入観は心のなかで成長し，先入観の演ずる役割にはほとんど気づいていない．ミッチェルは，経済学を進歩させるべく，先入観を熟考する．―― *Ibid.*, p. 205.

生計を立てさせ，今まで以上に豊かにさせないようにしておくような方法で価格を規制することであった[30]．」

制度体制は，ミッチェルによれば，大部分の個人行動に影響を及ぼす．ミッチェルは，この影響が生み出す結果として生じた事態を観察する．制度は個人が活動することに対して権威を振るう．それゆえ社会体制は，思考ならびに活動を規格化する原因となり，個人活動を共通の型に入れて作る[31]．ミッチェルは，次のような注目すべき見解を述べる．

「社会制度は，一般的な思考習慣にすぎない．それゆえこの思考習慣は，行為を導くうえでの規準として，世間の支持を得ている．この形式において，社会概念は個人に対して慣例による権威を振るうに至る．社会集団に属する成員全員が社会概念を日常用いることは，知らぬ間に個人を共通の型に入れて作る．そして独創的な行為を望む人々の進路に，現実の障害物を置くこともある[32]．」

ミッチェルの考えでは，「人間性は，最初から引き継がれてきた既製のものではなく……[33]」「……社会が生み出すのがほとんどである……[34]」あるいは人間行動は制度が生み出すにもかかわらず，正統派経済理論の類型は，人間はある特定の制度の論理に完全に支配されると思い込んでいる．「現状を説明するうえで，経済学者は，現代人が使用するのを漸次学習してきた概念をあたかも当然のこと，つまり人間として生まれつき備わっている能力の不可欠な部分……として扱うとき[35]」深刻な誤りを犯す．「合理性が特徴づける抽象的な人間性を主張する必要は論理的にはない[36]」にもかかわらず，正統派経済学は人間性における合理的要素を強調しすぎ[37]，個人の理解力・分析力を過大評価している．個人は，社会的・制度的状況に対して外生的であるとみなし，理論を構築する．しかしながらグルーチーの所説をまつまでもなく，「経済生活を合理的にするものは，人間の心が有するある計算能力ではなく，貨幣の使用をめぐって構築される制度複合体全体である[38]．」それゆえミッチェルは，「……経済行動それ自体が合理的であると仮定して経済理論を展開する方法は，理論を構築する最も安易な方法であるけれども，この方法は，事実に反する仮定に基づいている[39]」と主張する．また同様に合理性は「後天的習性である．堅固な土台ではない．もっともその土台に基づけば精巧な理論的構築物は苦もなく組み立てられよう[40]」と述べる．いかなる合理性を人間が有しているかは，大部分，制度に総括されるのに，正統派理論は，制度ならびに制度が経済行動・効果に及ぼす影響について首尾一貫した理論を立てられなかった．

これまで経済学者は，経済生活のもつ意義を軽視してきた．人間は金銭的環境が生み出すにもかかわらず，人間行動を高度に発達した貨幣経済において説明する．正統派の経済的合理性は，金銭的規準・制度に慣れさせることから生ずる．こうして合理性を説明する際，ミッチェルは貨幣を使用することを重視する．金銭的概念は，人間に経済生活を合理化するように教え込む．その結果貨

30) W. C. Mitchell “Money Economy and Modern Civilization,” p. 349.

31) Wesley C. Mitchell, “The Rationality of Economic Activity,” *Journal of Political Economy,* Vol. 18, No. 2-3, 1910, February-March, pp. 202-203, 208.

32) *Ibid.,* pp. 202-203.

33) *Ibid.,* p. 111.

34) Wesley C. Mitchell, “Human Behavior and Economics: A Survey of Recent Literature,” *The Quarterly Journal of Economics,* Vol. 29, No. 1, November, 1914, p. 3.

35) W. C. Mitchell, “The Rationality of Economic Activity,” p. 204.

36) *Ibid.,* p. 216.

37) *Ibid.,* pp. 103-111.

38) A. G. Gruchy, *op. cit.,* p. 279.

39) W. C. Mitchell, *Types of Economic Theory,* Vol. Ⅱ, p. 787.

40) W. C. Mitchell, “The Rationality of Economic Activity,” p. 201.

幣の使用は，経済生活の合理的理論を立てるための基礎を築く．制度的状況に活動目的は関連している[41]．そしてミッチェルの分析では，金銭的合理性が受け入れられる過程において，労働用役・現物支払いを貨幣支払いに振り替えることや軍役免除金が発展したことに比べ，市場価格を規制から解放することの方が社会秩序の土台を破壊した．中世意思決定は経済的合理性に基づいていなかった．市場が成長するなかで，金銭的思考習慣を獲得していったとミッチェルは考える．

このように本稿で取り上げた封建制度から市場制度への変化過程をめぐるミッチェルの分析には，極めて注目に値する独自の制度主義の見方が包摂されている．しかしそのミッチェルの研究を全体としてみてみると，また新たな様相が浮かび上がってくるのも事実である．

ミッチェルは，当初本講演原稿を論文の形で公刊する意図をもって準備していたと考えられる．事実講演にもかかわらず文献の引用は多岐にわたっているし，その引用文献の書誌情報も脚注において詳細に記している．しかし実際に論文として発表されることはなかった．さらにミッチェルの研究業績を見渡しても，『景気循環――問題とその設定――』のなかの簡潔な記述[42]以外に封建制度から市場経済への長期にわたる歴史的次元を含む研究業績はほとんど見いだせない．

ミッチェルは，スタンフォード大学で講演を行うに当たり経済体制が長期間にわたってどのように変化するか，その様式の研究に本格的に取り組んだ．経済体制は様々な変化に制度的に反応するとした．しかしこれまでみてきたように，複合的な結果を引き起こす要因は様々であるから，そのもつれた因果関係の糸を解きほぐすことに大変苦労した[43]．生活史がどのように累積的に変化するかを測定によって論ずることには限界があるとした．つまり経済データを量的あるいは統計的に処理する方法を広く利用し，集団の経済行動を客観的かつ量的に分析することは困難であると認識した．思弁性を排除し累積的因果過程を量的・経験的に論じようと最大限努力したにもかかわらず，必ずしも満足の行く結果を得られたとは考えていないといえよう．最近のデータはさておき，封建時代における十分な量的データを入手し，それらの歴史的データを統計的に分析することはできなかった．作業仮説と実際の過程との関連を観察し検証することはできないと考えた．このような長期的な歴史的次元を含む研究は思弁性を完全には排除できないという理由で，その研究成果の正式な発表は控えたといえよう．そこでミッチェル自ら長期的な歴史研究から退き，貨幣経済の特定の問題，取り分け企業循環の問題に量的，経験的，そして統計的にアプローチしていったと考えられる．統計データがもつ特徴を看取し，金銭制度と財を生産・分配する効率との関連を綿密に検討する．そして貨幣経済として有名な制度の支配的な複合体を建設的に研究する[44]．つまり本研究で取

41) Lawrence A. Boland, *The Foundations of Economic Method* (London: Allen & Unwin, 1982), pp. 30-37.

42) W. C. Mitchell, *Business Cycles: The Problem and Its Setting,* pp. 66-74.

43) ジョン・ラーツィスは，ミッチェルは自身の大規模な貨幣経済の研究計画に失敗したと捕らえている．――John Latsis, "Veblen on the Machine Process and Technological Change," *Cambridge Journal of Economics,* Vol. 34, No. 4, July, 2010, p. 605.

44) Cf. Wesley C. Mitchell, Letter to John M. Clark, reprinted in John Maurice Clark, *Preface to Social Economics* (New York: Farrar and Rinehart, 1936), pp. 413-415; W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money,* pp. 137-148, 279-312. Wesley C. Mitchell, "The Role of Money in Economic History," *Journal of Economic History,* Vol. 4, December, 1944, pp. 61-67; Lucy Sprague Mitchell, *Two Lives: The Story of Wesley Clair Mitchell and Myself* (New York: Simon and Schuster, 1953), pp. 176, 186; Wesley Clair Mitchell, "The Place of Veblen in the History of Ideas," in *Veblen's Century: A Collective Portrait,* edited with an introduction by Irving Louis Horowitz (New Brunswick: Transaction Publishers, 2002), p. 52.

り上げたミッチェルの講演原稿は，長期間にわたる経済体制の研究から，貨幣経済における特定の問題にミッチェルを向かわせるひとつの契機となった研究として位置づけられよう．このようにみてくると，本稿で取り上げたミッチェルの講演原稿は，ミッチェルの主要関心事である企業循環研究のもつ特徴を新たな見地から再評価する手掛かりを得るうえで極めて重要な価値を有しているとみなすことができよう．